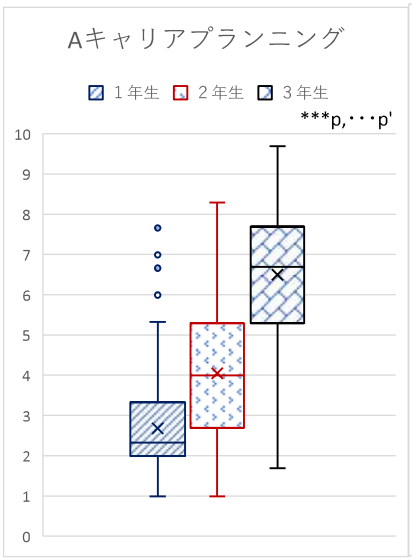
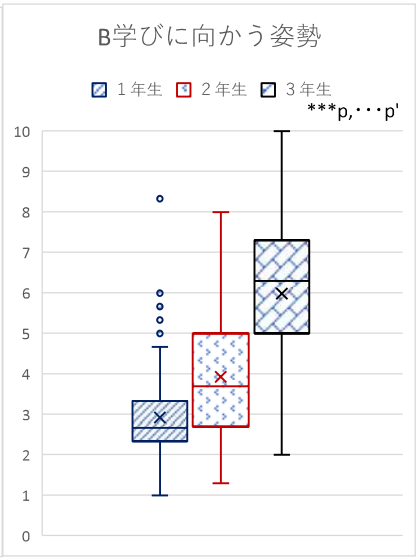
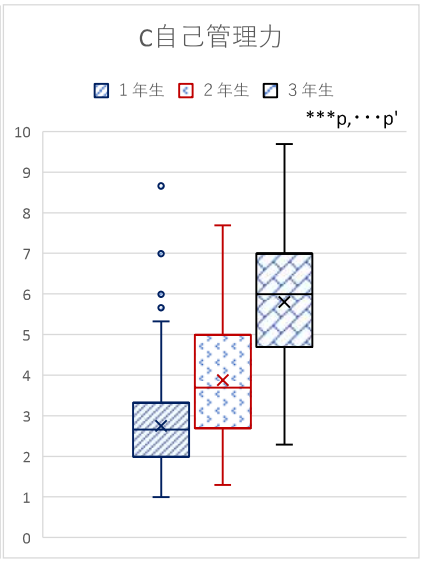
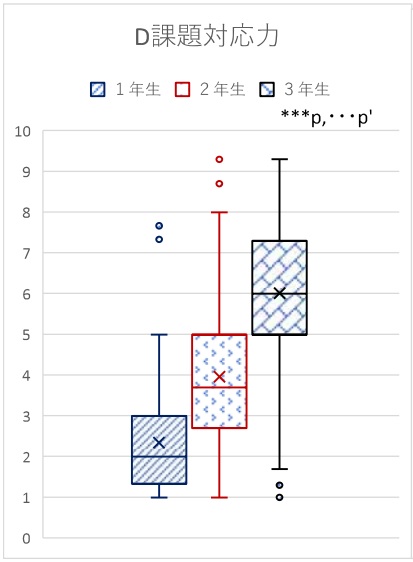
3　実施の効果とその評価

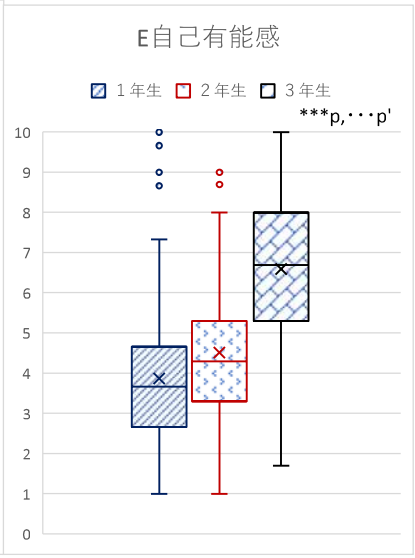
1－（1）未来デザイン力マスタールーブリック評価（学年間比較）

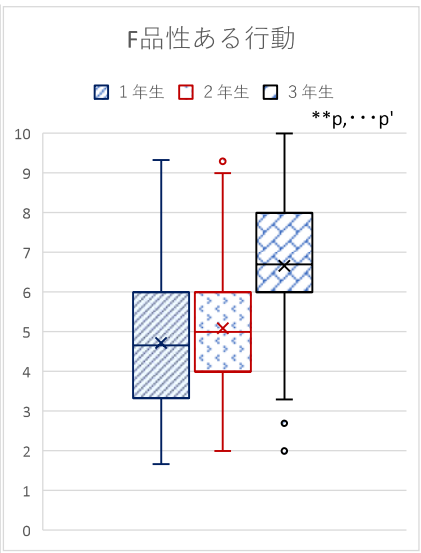


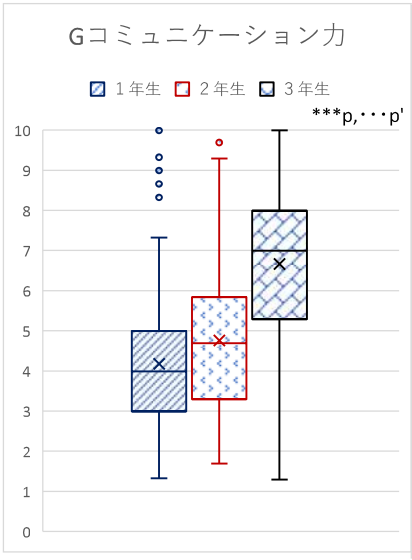


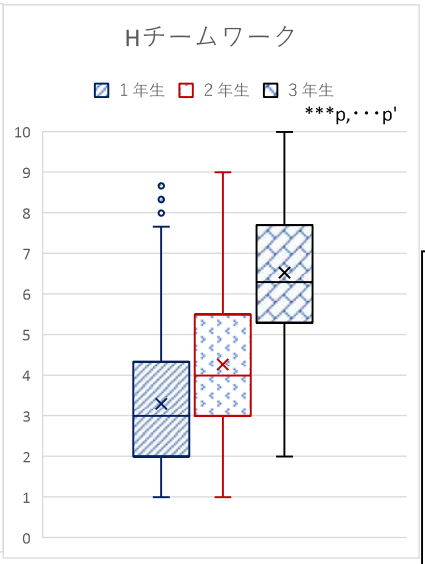










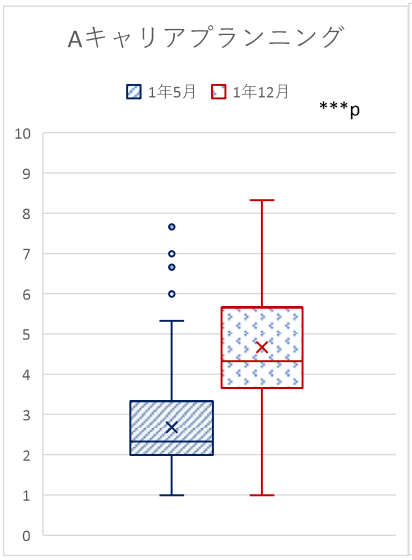


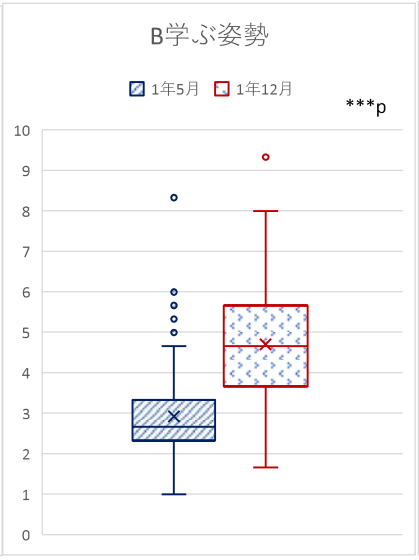
1年生：64回生5月調査N=235
2年生：63回生7月調査N=202
3年生：62回生9月調査N=223

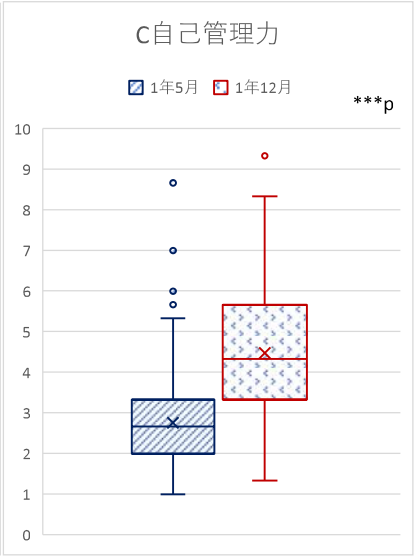
1～2年生比較　2～3年生比較
***p＜0.001･･･p'＜0.001
**p<0.01　　･･p'<0.01
*p<0.05　　･p'<0.05

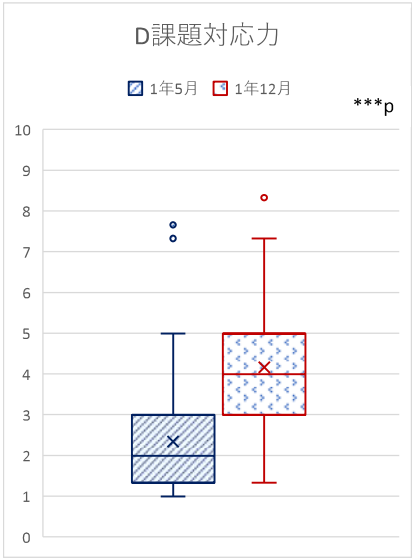
「未来デザイン力マスタールーブリック」を用いて調査した各学年の初回調査を比較した。
　全項目において、上級生ほど、高い評価である。各学年の分散状況や平均の差がはっきりと表れており、３年間のＳＳＨ事業を経験してからの各資質・能力の違いは見て取れた。特に、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄでは、低学年生徒との違いが大きい。今後各学年・個人の経年変化を追跡していき事業の効果を見極めていく。（**マスタールーブリック抜粋　参考資料ｐ７８**）

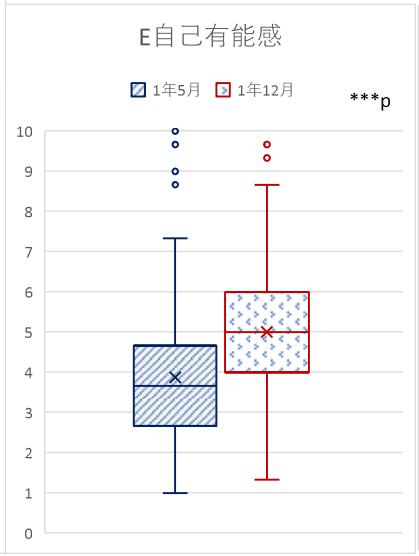
1－（2）未来デザイン力マスタールーブリック評価（1年生5月→12月）

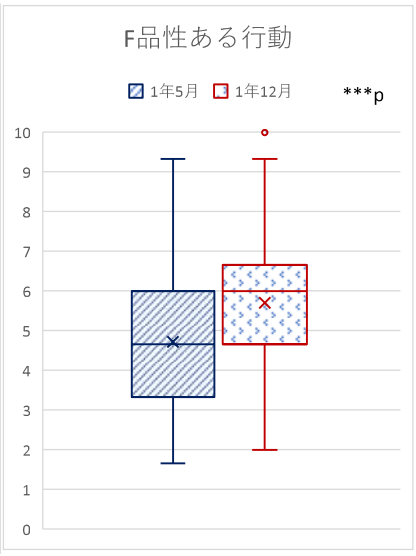


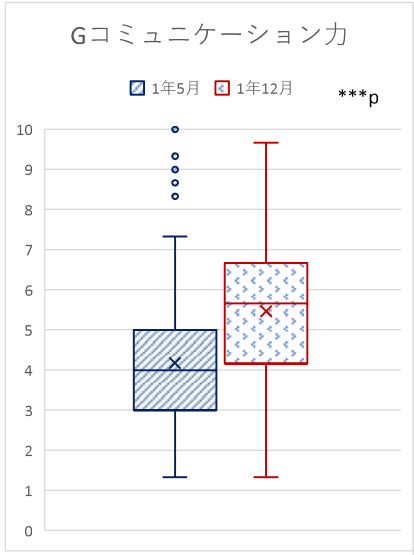


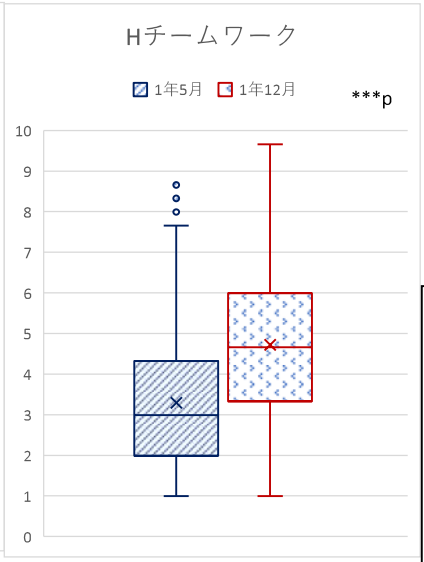












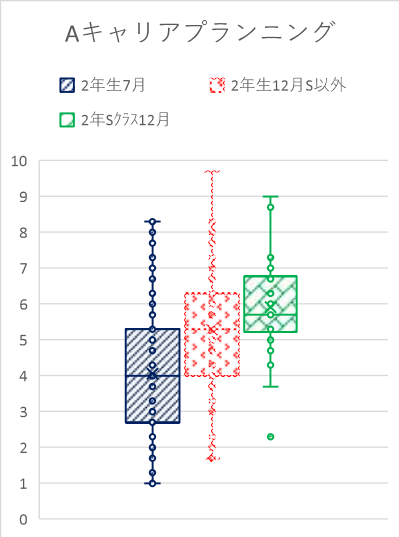
64回生5月調査（N-235）
64回生12月調査（N-198）

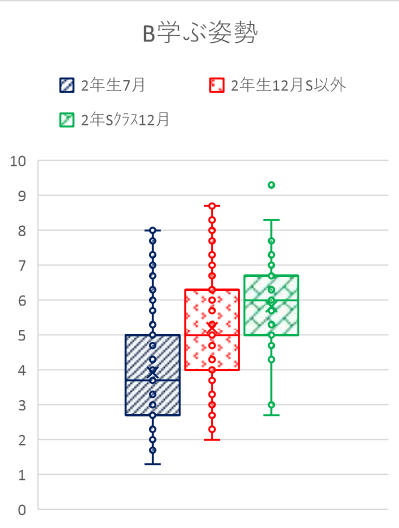
***p＜0.001
**p<0.01
*p<0.05

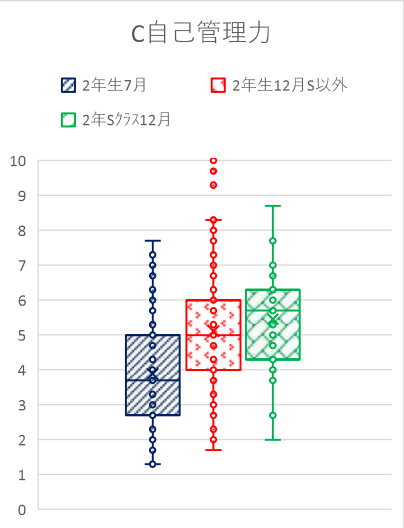
全項目において、上向きの変化が見られた。F、Gのような自身の行動や態度に関することは、１年生としての判断が甘かったり、自身で判断しづらい面が結果に表れているかと思われる。
A、B、Dについては、入学当初の自己判断はかなり低いところから始まったが、ＳＳＨの諸活動や高校での生活を通して、自身の良い方向への変化を感じている生徒が多くなったものと考えられる。

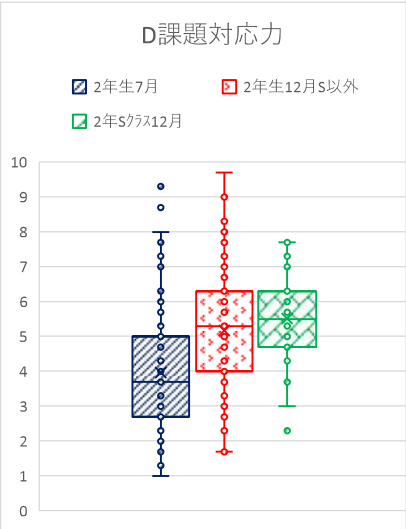
1－（3）未来デザイン力マスタールーブリック評価

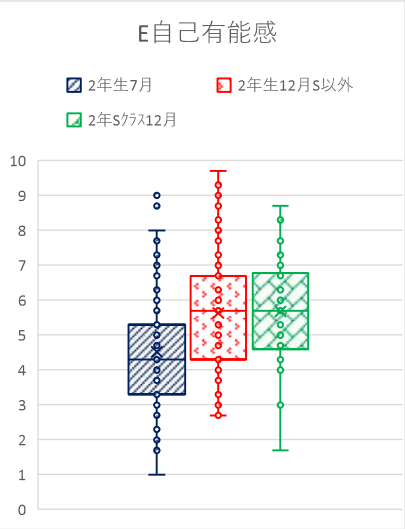
（2年生7月→12月Sクラス以外・Sクラス）

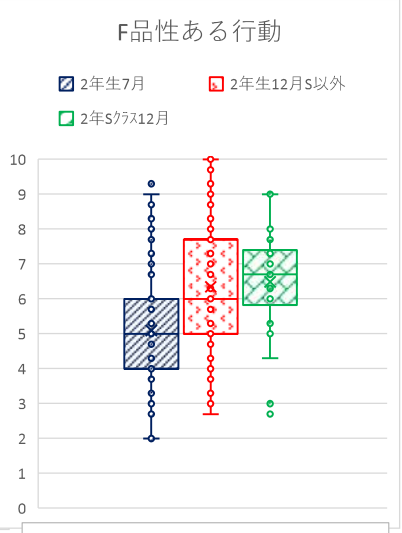


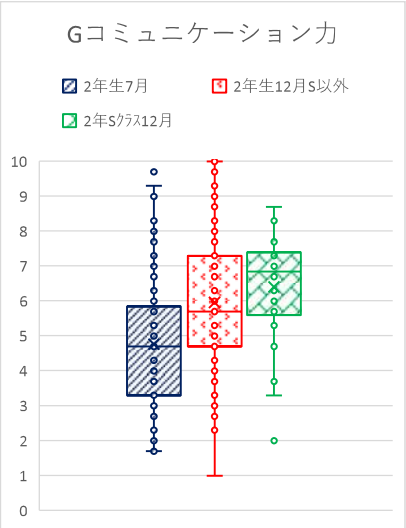


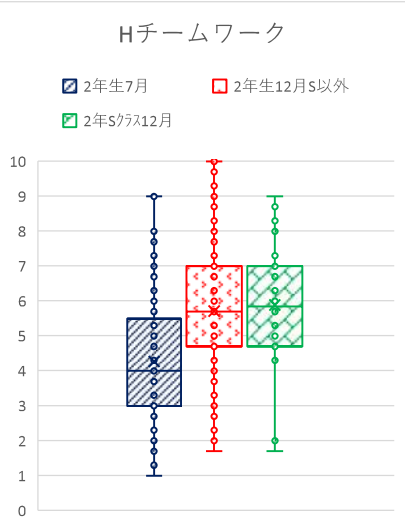








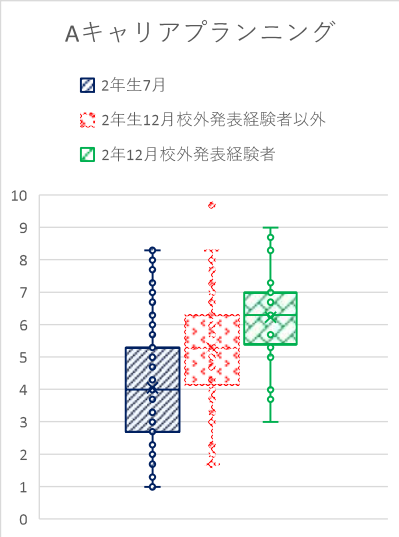


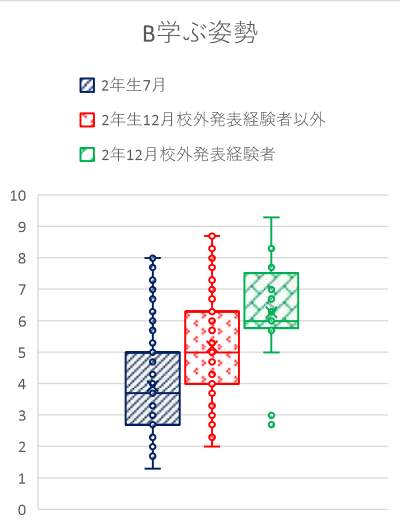


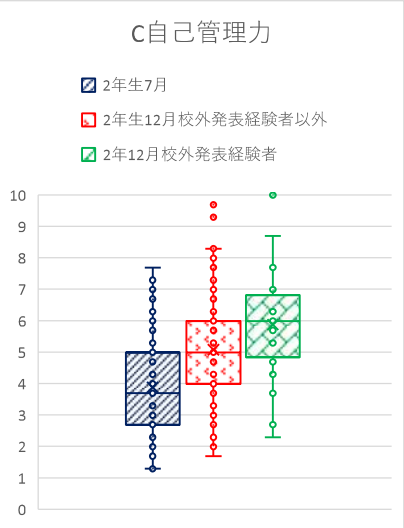
1学期末と2学期末に実施した。全体として上昇傾向にある。発表する体験を経て、特に自己有用感やコミュニケーション力の高まりが見られた。記述式のアンケートと併せて見ると、生徒は自分の成長を実感しており、臨機応変に対応できる力や他者の意見を尊重する姿勢が身についていることがわかった。課題研究の指導では自身の振り返りとフィードバックからの学びに重点を置いて指導してきたが、今後も継続して取り組みたい。１２月時点のＳクラス以外の生徒とＳクラスの生徒を比較した結果では、Ｓクラス生徒の方がＡ、Ｂ、Ｄ等いくつかの項目において平均値がやや高く出たが、A、Ｂ以外は有意差はみられなかった。

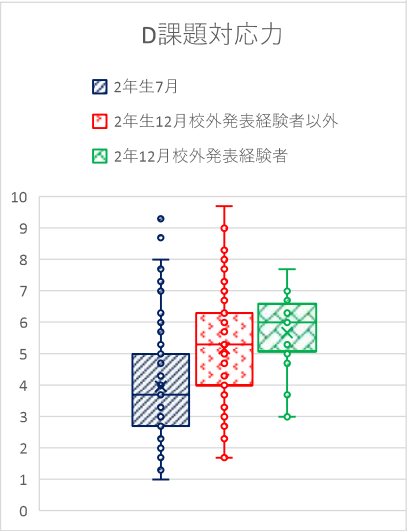
1－（4）未来デザイン力マスタールーブリック評価

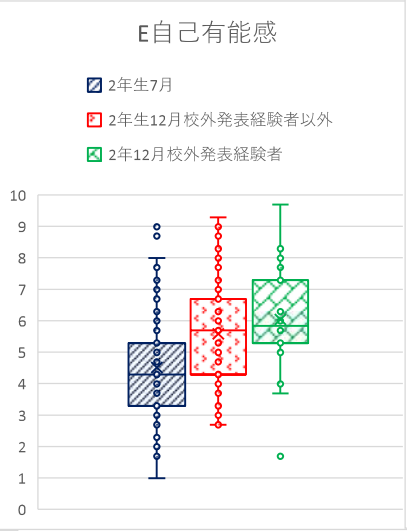
（2年生7月→12月校外発表経験者以外・校外発表経験者）

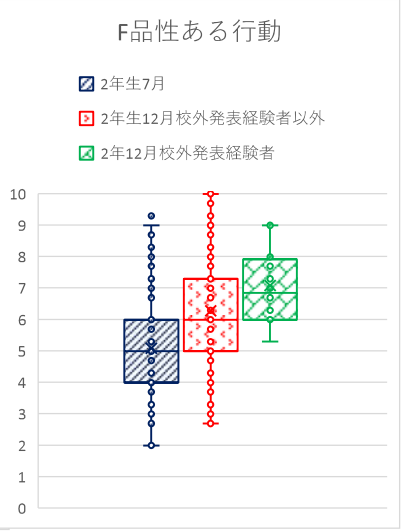


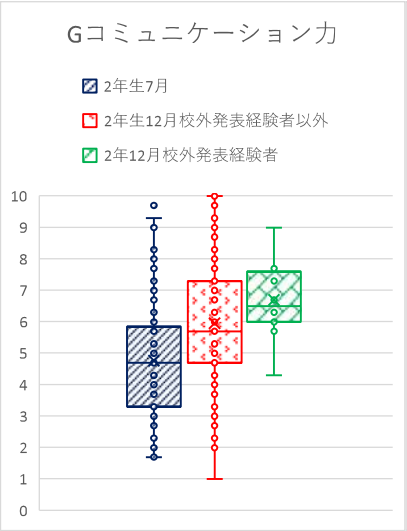


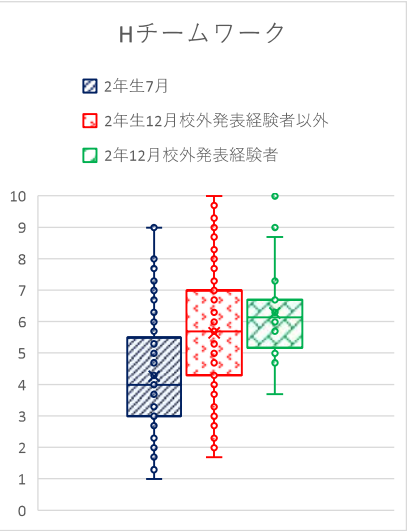








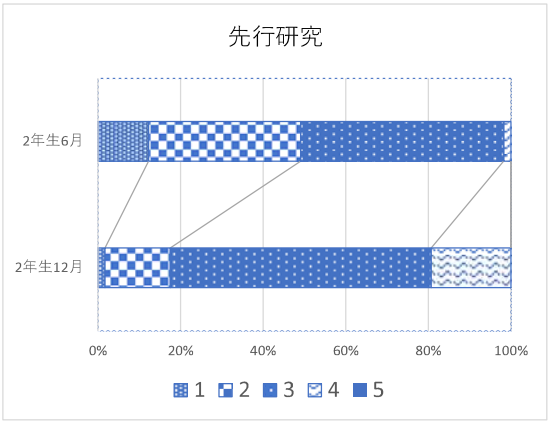


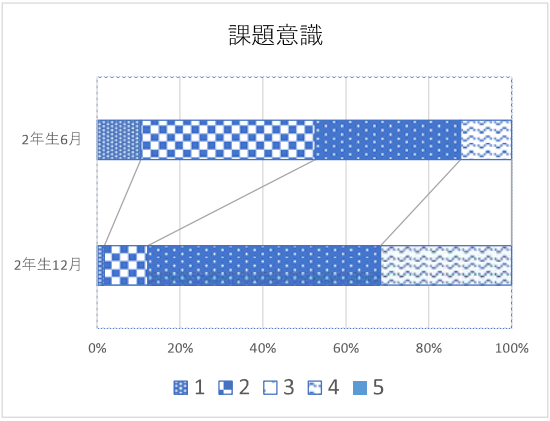


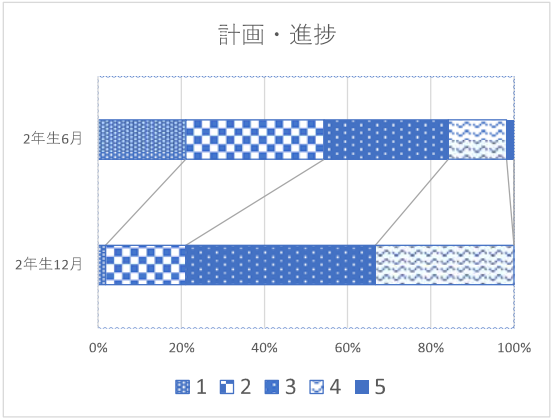
２年生７月→１２月比較において、１２月までに校外での研究発表機会を経た生徒と、そうでない生徒を並記した。

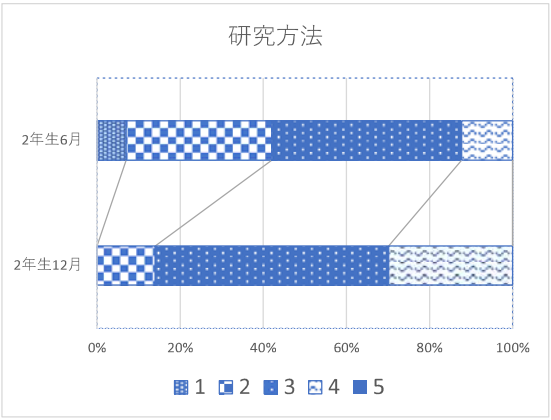
校外的な発表を経験した生徒では、そうでない生徒に比べて、いくつかのグラフにおいて一段高い平均値を得たが、有意差が得られたのはA・B・F・Gの４項目であった。深い学びに対する興味関心の高揚とともに、学外の人々（特に大学企業等の外部専門家）と対峙する機会を得ることで、自身の行動を正し、積極的に対話する姿勢を高めてきた傾向がみられた。

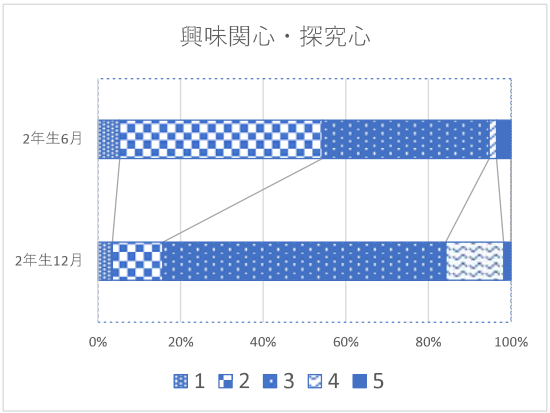
2　２年生（63回生）課題研究活動ルーブリック班別評価（6月と12月の比較）　N=57班

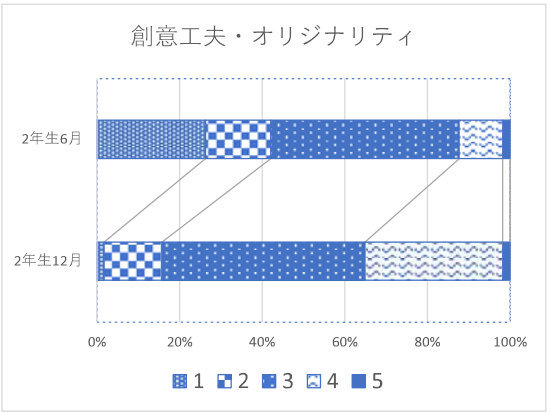


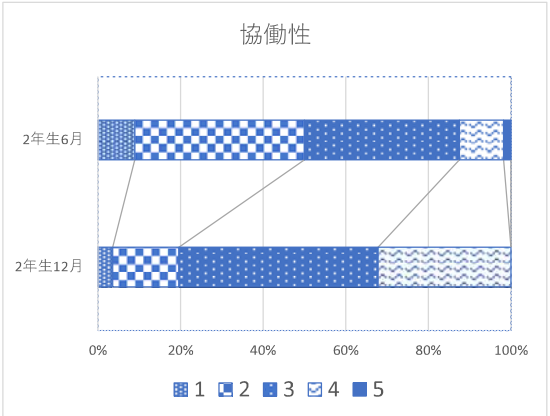








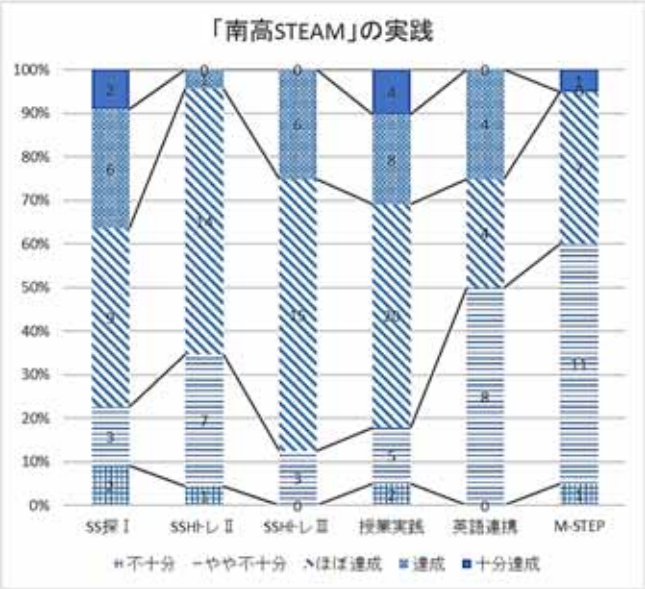


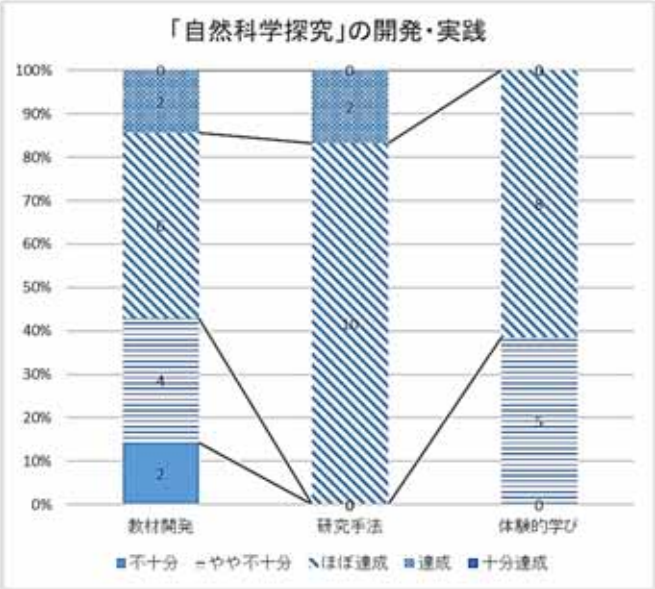


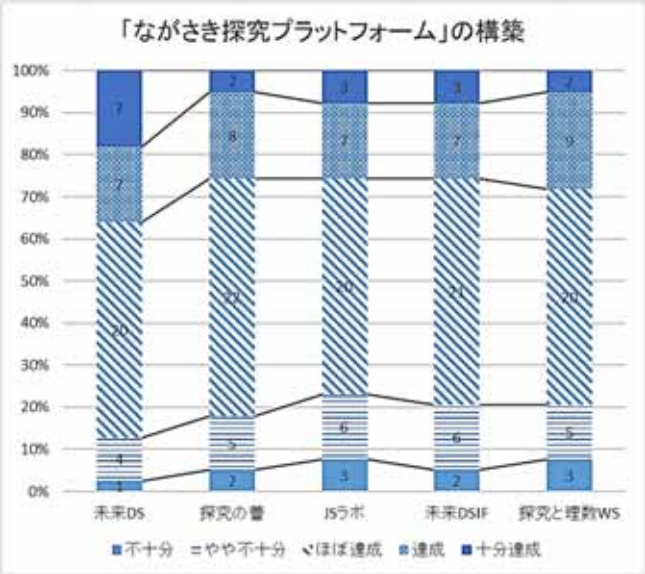
2年生の6月と12月の課題研究活動の班別ルーブリック評価を比較した。評価の実施時期は、第1回はグループ内発表会（6月）の後、第2回は中間発表会（12月）の後である。全項目において上昇が見られたが、特に平均値の上昇が大きかったのは、課題意識、創意工夫・オリジナリティ、計画・進捗であった。未来デザインスクールでの専門家との対話や発表会での他校・本校の教員・大学生との質疑応答など第3者とのコミュニケーションが研究に大きな刺激を与えたこと、年間計画で活動期間を3期に分け節目に発表機会を設けて研究活動の計画的な進捗を目指したことなどが要因と考えられる。また、これらの研究の進捗を得て、研究大会・コンテストに挑戦する班も増え、そのことが探究心の向上にも繋がっているものと考える。（**課題研究活動ルーブリック　参考資料ｐ７９**）

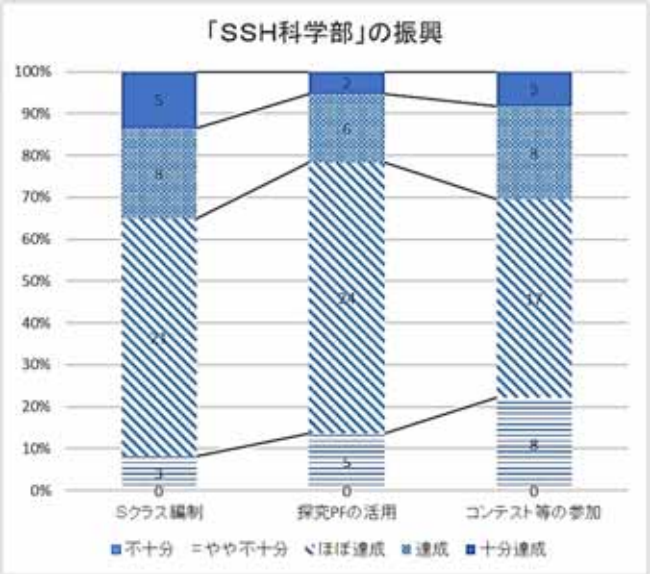
３　ＳＳＨ事業アンケート（教員）　R6.12 実施　n=39

3-1　ＳＳＨ第Ⅲ期各事業取組について









『南高ＳＴＥＡＭ』の実践について、授業実践が学校全体で浸透した様子がうかがえた。肯定的な評価（十分達成・達成・ほぼ達成）が昨年度の 51%から 82%へと上昇した。

『自然科学探究』の開発・実践については、昨年度までの教材開発が終わり、今年度から実践を行った結果、研究手法に関してはおおむね高い評価が得られた。本校職員による実験・観察が十分できており、理科４分野どの科目においても実施できている点は評価できると考えられる。

『ながさき探究プラットフォーム』構築については、探究の蕾・ジュニアサイエンスラボ・探究と理数ワークショップにおいて昨年度よりも肯定的な評価が得られた。昨年度よりも内容を充実したことや職員への幅広い周知などの成果だと思われる。現状維持にとどまらず取組の状況が校内の職員に分かりにくい企画については、校内での実践報告の機会等を設ける必要があると考えられる。

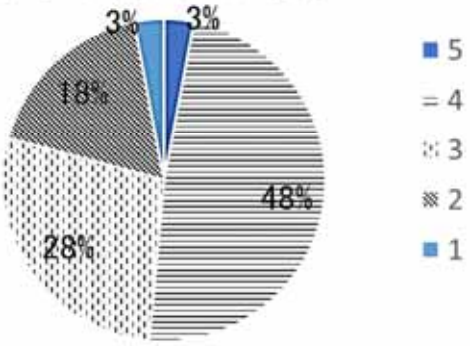
『ＳＳＨ科学部』の振興については、職員の認識や成果の共有が図られた成果により、概ね高い評価が得られた。また、積極的に外部発表等に参加を促す教員の増加も見られた。

3-2　課題研究指導について

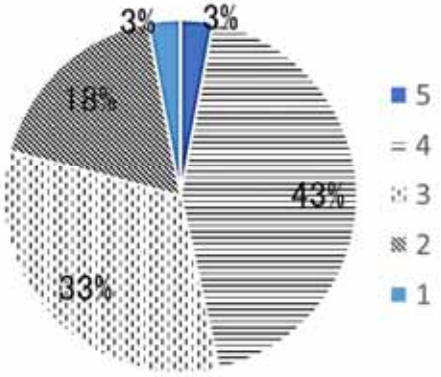
R6.12 実施　n=39

５そう思う　４ややそう思う　３どちらでもない　２あまり思わない　１全く思わない

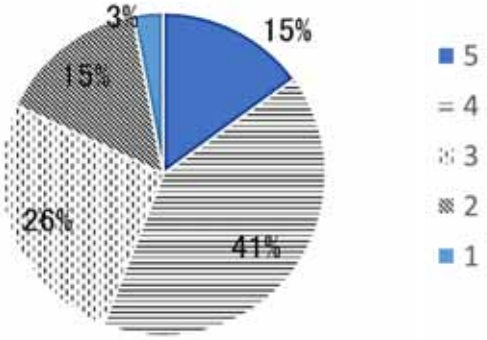
1　リサーチクエスチョンや仮説・研究計画書について生徒への指導やディスカッションができる



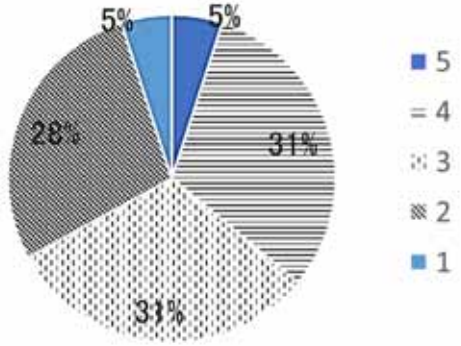
2　研究の進め方や改善について指導ができる



5　課題研究など、探究的学びの指導に活かせる知識が増えた

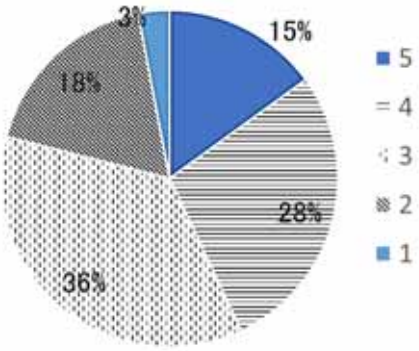


6　より深みのある課題研究にさせるために、生徒と外部専門家との接続ができる

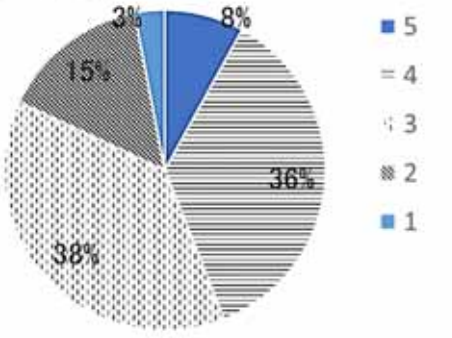


『Q1 リサーチクエスチョンや仮説・研究計画書について生徒への指導やディスカッションができる』についてはほぼ半数の教員が肯定的な評価（5，4）であり、課題研究指導の経験値が高まっている結果であると考えられる。また、外部接続についても肯定的な評価が 36%（昨年度 28%）と増加しており、未来デザインスクールやながさき探究プラットフォームの活用の成果が少しずつみられる。今後、より積極的に外部接続ができるように支援体制を確立していかなければならない。

7　S探、Sトレの各企画で、課題研究の指導力が高まった



9　自分の教科授業で、「南高STEAM」に沿った授業（教科横断型、思考学習型、学習到達度を意識した授業）の実践ができる。



『Q7 S 探、S トレの各企画で課題研究の指導力が高まった』については、肯定的評価は 43%、『Q9 自身の教科授業への実践』は 44%と昨年度に比べ上昇した（+18%、+11%）。南高 STEAM などの授業実践を広く公開するなど、次年度に向けての課題を整理・改善しながら推進を図らなければならない。